特許翻訳研究の機能論的アプローチ

―選択体系機能言語学の視点―

日本機能言語学会会員
カワシマ・トランスレーション・エージェンシー　川島　俊男

要　約

従前「パテント」に発表した拙稿「特許翻訳文改良のためのパラグラフライティング」において，M.A.K. Halliday の創始した選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics：以下 SFL）の説く Theme / Rheme 構造と情報構造についてのあらましを紹介したところ，業界の専門家や翻訳者諸兄姉から大きな反響をいただいた。爾来十数年，SFL を分析ツールとして日英特許翻訳の対訳分析に適用，テクスト形成的意味の観点から特許明細書の日英翻訳の理論研究を進めてきた。そこで得た理論的知見を筆者の主催する日英特許翻訳講座の受講生にフィードバックした結果，SFL は，適正な運用ノーハウを身につければ，特許翻訳文，わけても英訳文の質的向上に大いに奉仕する翻訳ツールとして活用できることが実証された。

そこで本稿では，読者諸兄姉の SFL への関心の喚起を図り，特許翻訳への応用を促すため，分析ツールとしての SFL の翻訳における具体的な運用例を紹介する。

目次

１．はじめに
２．SFL の談話分析の英訳への応用
（１）　三つの意味
（２）　コピュラ文について
３．Case Study
（１）　Case Study 1
（２）　Case Study 2
４．おわりに

１．はじめに

「パテント」の愛読者であればご記憶の方もあろう。十数年前，拙稿「特許翻訳文改良のためのパラグラフライティング」[(1)]が同誌に四回シリーズで分載された。SFL の説く三つのことばのメタ機能のうち，特に翻訳とのかかわりが深いテクスト形成的メタ機能，すなわち，Theme / Rheme 構造と情報構造の概要を対訳形式で紹介したものであった。予想外の反響の大きさは，業界関係の翻訳者諸兄姉が，主観や直感に依存した翻訳実践に心もとなさを感じ，理論に裏づけられた確乎たる翻訳力を希求していることを物語るなによりの証左ではなかったかと受けとめている。その背景には，昨今のインターネットの普及による背景技術検索の軽便化，機械翻訳の精度向上による負担の軽減などにより，人手翻訳に臨む翻訳者にとって，本来翻訳者に求められる力量，すなわち，原文に対するより深い解釈力とより自然で読みやすい訳文の生成能力がいやましに問われる時代となっている事情もあるようだ。

爾来，内外の特許明細書を対象に，SFL を分析ツールとして日英対訳分析に適用，テクストの結束性保持のための方略や英訳への理論運用について探索を続けてきた。そこで得た知見を主催する日英特許翻訳講座の受講生に還元した結果，ひとたび SFL 理論に根差した思考法を体得すれば，直感的，主観的な認知のみに依存しない，より客観的な翻訳実践を可能とし，テクスト性の高い訳文を生成する翻訳力の獲得につながることが確認された。

そこで，本稿では，翻訳の場における，SFL のテクスト形成的メタ機能を運用して，和文の原文と訳文である英文の結束性を保持する方略の一端を示すため，主題構築に視座を置いた事例研究を二つ取り上げて紹介する。

２．SFL による談話分析の英訳への応用

以下，原文を SLT（Source Language Text=起点言語テクスト），翻訳文を TLT（Target Language Text=目的言語テクスト）と略記する。また，主題と題述については，文脈に応じて，和文表記と Theme, Rheme の英語表記とを適宜使い分ける。なお，主題

の展開パターンの概要は，「特許翻訳文改良のためのパラグラフライティング」を参照されたい。

翻訳は，等価という概念抜きに語ることはできない。明細書翻訳の場合，用途によっては鏡像の如き翻訳を求められることから，わかりにくいSLTは難解なままに翻訳すべし，という等価論を生みがちである。しかし，特許翻訳文がSLT著者の意図の伝達を任務とする以上，少なくともSLTと同程度の「理解内容の等価」（成瀬，1996：7）[(2)]を目指すべきであるし，米国におけるように，明細書の潜在的読者として非専門家である陪審を想定しなければならない場合などは特に，TLTがSLTより読みやすくて何ら不都合はあるまい。

読みやすい訳文とは，成瀬に倣って，SLT筆者の意図が理解しやすい訳文である（同上）と定義しよう。抽象度が高く，階層的・相互依存的に論理が展開される明細書の意図の正しい解釈には，SLTのTheme構造や情報構造，ことばの「指示」や「照応」，「省略」などの言表の結束装置を手がかりにテクストを分析することが求められる。一方，理解しやすいTLTは，目的言語話者にとって違和感のない，結束性の高い訳文によって実現される。Theme / Rheme構造と情報構造，連文のつながりの展開の仕組みの面からテクストを組み立て，成熟度の高いTLTにしたてあげるのである。そのためには，SLTの解釈，TLTの生成両面において，後述することばの三つの機能のうち，テクスト形成的メタ機能の分析に重心を置くことによって，テクスト次元での結束性の等価を図らなければならない。

この間の消息は，SFL理論を翻訳研究に応用したBaker（1992）[(3)]の中でも唱えられている。Bakerは，語，フレーズ，文法，テクスト，語用論の5つのレベルの等価のうち，テクスト的等価の実現が翻訳者の目指すべき究極の目的であると述べている。テクスト的等価をTLTの言語特性に合った結束性や首尾一貫性を実現することと理解すれば，翻訳臭のないTLTの生成には，SLTのテクスト構成法を，TLT読者の嗜好に合うように調整すべしと説くBaker（同上，112）の主張は，先述の読みやすい訳文の条件と符合する。

かくして，テクスト的等価を実現した読みやすいTLT生成のためには，SLTの伝達意図に合わせて，Themeや構文の選択がテクスト内の位置（文脈）に照らして適切かどうか評価することが欠かせない。この評価に経験則に基づく翻訳ルールを適用すると，評価者の主観の介入が避けられないため，別の客観的な評価ツールが必要となる。

この客観性を担保する道具立ての一つが機能言語学であり（Thompson，2004：250）[(4)]，その系譜に連なるのがSFLである。SFLは実際に使用されていることばを対象に意味形成を研究する言語学であり，多方面[(5)]においてことばを深く理解する談話分析（critical discourse analysis）ツールとして利用されている。

談話分析とは，語用論とともに翻訳などの異文化コミュニケーション研究に用いられる言語学的ツールの一つであり，Theme構造や情報構造，言語化された結束装置を手がかりにテクストを分析する方法である。この手法を対訳の分析に適用すれば，りっぱな翻訳研究がおこなえる。SLT，TLTのテクスト形成面でのずれのうち，翻訳者による構文選択の動機を探る。それがテクスト全体のThemeの展開に照らして意味あるものであれば，それからテクスト内における当該構文の使用条件を明確にすることができる。こうして得た知見は，翻訳実践の場において，日本語と英語のように結束装置の違いの大きい言語間の翻訳には，とりわけて有用な翻訳分析ツールとして活用できるのである。

SFLは，1960年代以降に発展してきた比較的新しい言語理論であるだけに，その術語や概念は一般になじみが薄いものが多い。なるだけ使用は避けるように努めるが，必要最小限の範囲で使用することをお許し願いたい。以下，そうした術語について簡単に説明しておきたい。

（1） 三つの意味

SFLは，ことばを「意味次元」で捉える言語学[(6)]で，ことばの意味は，三つのメタ機能が均衡（バランス）を保って，一体的に紡ぎだされると考える。

この三つのメタ機能とは，観念構成（経験）的・対人関係的・テクスト形成的メタ機能であり，SFLによれば，ことばの意味は，SFLの体系を成すこれらメタ機能ごとの選択の結果生み出されるという。いかめしい漢語だが，簡略すれば，観念構成（経験）的意味とは，心の中で感じたことや外的な世界で見聞したことをことば化した認知可能な意味である。対人関係的意味とは，読み手を説得するために，書き手の主張を緩和しつつ論旨の共有を図ったり，読み手への要求を緩

衝するために生成される意味である。最後に，テクスト形成的意味であるが，これは単なる文の塊をテクストたらしめるため，Theme や Rheme をどのように関連づけて 連文にまとめあげるかという，結束性や首尾一貫性に関わる機能である。如上の三つの意味について，大島（1997：9-16）[7]を参考にそれぞれのキーワードをまとめると表１のようになる。

観念構成的意味	対人関係的意味	テクスト形成的意味
過程構成 他動性 文法的比喩	法助動詞，modality 修飾詞（probably，等の副詞），肯定・否定，呼格	Theme 構造 情報構造 結束性

表１：SFL の提案することばの三つの意味

これらの意味は，三位一体の均衡を保ってこそ読みやすいテクストが実現する。しかしながら，長沼（2001：115）[8]の指摘にあるように，従来の翻訳研究は，観念構成的機能に偏向する傾向があり，テクスト的等価は等閑視されてきたのが実情である。日英両言語の Theme / Rheme 構造や Theme の進行パターンに関する共通点と相違点の知識に基づいて，SLT・TLT のテクスト形成的機能をどう調整して，SLT 筆者の伝達意図を TLT 読者に読みやすく伝えていくか。この問題に真摯に向き合うことによってはじめて，訳文の意味は本来の均衡を取り戻し，安定を見出すのである。

SFL の説くテクスト形成的機能は，Halliday & Matthiessen（2004：30）[9]のいう enabling or facilitating function を担う。ことばの観念構成的意味や対人関係的意味を円滑に伝達するための機能という意味である。いかに興味深い出来事を経験し，その感想を綴ろうにも，まずは，どのように文を連続させるか，談話の進行に伴って文相互の結束性や一貫性をどう確保するかという方略が不在であれば，対人関係的意味や経験的意味の適確かつ効果的な伝達はできまい。感じたことを語るだけでさえそうなのである。まして読者を説得するため論理に一貫性を持たせ，全体の意味のつながりを吟味しつつ，読み手と論旨の共有を図ることが求められる明細書の場合，テクストは，形式的・意味的に関連性を持った文の集合として構成されなければならない。こうした TLT テクストを生成するためには，組織化の重要性はいくら強調してもしたりないのである。

さらに，SFL を翻訳に適用するメリットがもう一つある。SFL の特徴の一つとして，伝統文法が懇篤な扱いを怠ってきた，コピュラ文という文類型について掘り下げた考察をおこなっていることが挙げられる。そのためか，コピュラ文については，形態こそ簡素ながら，いやむしろ簡素だからこそ，英訳にしろ，和訳にしろ，言表の意味にとらわれた誤訳の例が多い。そこで，この機会にコピュラ文についても少しく触れておきたい。

（２） コピュラ文について

コピュラ文とは，日本語の「A は B だ」，英語の 'A be B' などによって A と B とを関係づける文類型で，過程型と呼ばれる動詞の分類[10]のうち主に関係過程を実現する構文とされ，属性モードと同定モードに下位分類される。これに対して，日本語コピュラ文の分類では，同定モードは，さらに（倒置）指定文，（倒置）同定文，同一性文に細分化されている（熊本 1998：9-10）[11]。

	SFL	日本語
コピュラ文	属性モード	叙述文
	同定モード	（倒置）指定文，（倒置）同定文，同一性文

表２．日英コピュラ文の分類比較

コピュラ文は，科学論述文において繁忙を極める構文である。属性モードは，平行主題型の Theme 展開と組み合わせ，'A be X，' 'A be Y"…と構成することによって，Theme A について，Rheme で X，Y と属性を変えて累積叙述することによって叙述の範囲を拡張することができる。また，同定モードは，術語の定義，先行記述についての注解，証拠の解釈，指定，例示など科学的説明に不可欠の意味機能を持ち，安井（2008：89-90）[12]において，その同語反復的表現として科学的論述文において果たす役割の大きさが指摘されている。これは，'A be A'…という同語反復表現を少しずらして，Rheme に A を言い換えた B を設けて 'A be B' と同語反復的関係を構築し，連続主題型と組み合わせ，以下，'B be C，'"C be D"…と同語反復的に表現を累積していくことによって，「目を見張るような大きな成果を包み込んだ科学的論述」（同上，89-90）

を可能にするという意味である。明細書におけるその重要性は推して知るべしである。

SFL では，英文コピュラ文のうち同定モードの文について，コピュラを構成する名詞句に，Identifier（同定者）・Identified（被同定者），Token・Value といったラベルを与えて，筆者自らが難解というほどに深堀りの考察を行っている（Halliday & Mattiessen, 2004：234）[13]。これらの掘り下げた考察を知ることは，翻訳者をして，コピュラ文の Theme と Rheme を構成する名詞句の意味的性格に対する意識をたくましくさせ，この重要な構文をより精密に運用することに資する。この点だけでも，翻訳の場に SFL を持ち込む意義があるといえよう。

しかし，SFL におけるコピュラ文の議論ははなはだ複雑である。特許翻訳に SFL の知見を応用するに際しては，言語学的厳格さを踏襲することもさることながら，むしろその適切な運用法に磨きをかけることによって SLT の意味解読，TLT における Theme や Rheme，さらには構文の結束性ある選択をより的確なものとすることに重心を置くべきであろう。

3．Case Study

Case Study 1 では，もとは一文の和文を二文に分けて英訳する事例を取りあげ，原文の伝達意図と推意の同定と，それを訳文に反映する際の主題構築の考え方について，Theme 名詞句の指示性の問題も含めて考察する。Case Study 2 では，言語表層の結束装置によりテクストの結束性（cohesion）を図るとともに，言表に現れない語用論的な前提による意味のつながりを利用して首尾一貫性（coherence）を保持する方略について，翻訳者がどのような主題構築によってそれを実現しているか考察する。

（1） Case Study 1

まず，和文 SLT を二文に分けて英文を生成するケースについて考えてみたい。

【SLT1】

従来より，細菌やウイルス，酵母等の微生物細胞または動物や植物等の多細胞生物から単離した細胞を人工的な栄養条件で培養し，それらを長期間生存させながら種々の操作を行う細胞培養が様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている。

【TLT1】（1i）（a）##Cell culture is（b）the process（1ii）by which microorganisms or cells are grown under artificial nutrient conditions and are kept alive for sufficient periods of time to permit various genetical manipulations to be carried out;（1iii）included among these organisms subject to cell culture are microorganisms such as bacteria, viruses and yeast, or those cells isolated from polycellular living organisms, such as plants and animals.（2）（c）This *in vitro* technique has been an extensively applied form of technology employed both in various branches of scientific study and for industrial production.

SLT1 は，【技術分野】の【背景技術】の冒頭に生起する文であり，文脈が与えられていないことを ## であらわす。一文の SLT を TLT で二文に分けて英訳する操作は，読みやすい訳文を得るための翻訳者の選択・判断によるものである。この選択には，統語上の動機と，テクスト形成的動機が働いている。いずれにせよ，この操作によって，SLT の伝達意図から逸脱してはならないし，TLT の結束性に乱れが生じてはならない。

そこで，まず問題となるのは SLT1 の伝達意図である。節[14]番号（1i）-（1ii）に対する和文「…細胞培養が様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている」に含まれる格助詞「が」は，読み手が持っている文脈的想定（前提）如何で，大きく中立叙述，総記のいずれかに解釈が分かれる。中立叙述の「が」は，談話冒頭などにおいて，読み手の知識に対する期待が低い状況で使用される。この用法の「が」を含む文は，書き手の主観や判断を表す判断文に対して，眼前に展開される事実を叙事的に述べる現象文に分類される。現象文は，文全体が文脈に初めて導入される新情報であり，その主語は日本語では「～が」で標示され，主題を表す「～は」は使用されない。つまり，現象文とは主題を持たない無題文であり，本用例では，主語述語一体をなして「細胞培養が様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている」というバイオ分野における最近のニュースを伝えている。

一方，総記の「が」は，「バイオ分野において，様々

な研究分野，工業生産分野で広く行われている技術が何かある」ことを読み手が知っているという文脈的想定が成り立つ状況で，「その技術とは何か（どれか）」という問いかけに応じた文である。この構文は，限られた選択肢の中から該当する要素を余すところなく選択指定する機能を持つ指定文という文類型に属する。「細胞培養が…広く行われている」という指定文は，「広く行われているのは…細胞培養である」に倒置が可能であることから，主題のある有題文であるが，それを明示しない陰題バージョンである。

SLT1 の文を中立叙述，総記のいずれに解釈すべきかの判断にあたっては，【背景技術】の冒頭に生起する文であるという事情を考慮しなければならない。【背景技術】では，自然法則を利用した高度な技術的思想である発明を理解させるために必要な「目的」「構成」「効果」の三つの要素のうち，従来技術の課題を記載することで「目的」を明確にする。課題の記載に先立って，発明者としては，発明の価値を高からしめるため，従来技術の産業上の利用可能性，すなわち，有用性が高いことを訴求するのが都合がよい。こう考えると，SLT1 は，明示的には，「バイオ分野において，最近何かニュースはないか」という問いかけに応じて，「細胞培養が様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている」という現象を述べた現象文であると判断される。もちろん，書き手の真の伝達意図は，ニュース報道にあるわけではなく，「細胞培養は様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている有用性の高い技術である」ということが述べたいのは言うまでもない。この伝達意図（表意）と当該文の明細書中の位置から推論すると，後続文脈における課題の導入の布石となる「細胞培養は改良に値する技術である」という推意が得られる。SLT 表層の解釈は現象文であるが，原文の意味を伝えるという観点に立てば，言表の現象文にこだわる必要はなく，上の真の伝達意図や推意が引き出せる構文選択の動機が優先されるべきである。まして，二文に分けて英訳する場合はなおさらであろう。

SLT の真の伝達意図が明らかとなったところで，SLT 内での変化（意味境界）を見出して，二文に分ける。統語的には，「細胞培養」を核にし，その前後で分けるのが簡便である。すると，「細菌やウイルス，酵母等の微生物細胞または…種々の操作を行う」という部分と「細胞培養が様々な研究分野，工業生産分野で広く行われている」という部分に腑分けされる。これには，SLT では他の節内に埋め込まれた部分（の一部）を，TLT では独立させて焦点化したいという情報構造に関わるテクスト形成的動機も作用している[15]。

この焦点化の動機の発動には，「細胞培養」に関する読み手の知識水準の査定が関わってくる。前半の「細胞培養」の語義を伝える長大な修飾要素は，話題についての読者の知識への SLT 筆者の期待が高くないことを物語っている。読み手に前提知識のない環境で未知のことばがこれこれの属性を持っていることを述べるテクストを構成するには，まず対象語句の語義を明らかにし，続いてその属性を述べるのが事理にかなっている。そうであるならば，SLT1 前半の「細菌やウイルス，酵母等の…種々の操作を行う」は，TLT1 では，「細胞培養とは何であるか」という細胞培養の意味をメタ言語的に詳しく言い換えて説明する定義文として独立させることになる。定義文が談話冒頭に使用されるのは，テクスト構成上あながち不自然なことではない。そうすれば，SLT1 の「細菌やウイルス，酵母等の微生物細胞または…種々の操作を行う」という表現が TLT1 では定義文の文末に配置され，end-focus（文末焦点）の原理によって際立ちを与えられることになる。

さらに，TLT1 後半は「細胞培養は改良に値する技術である」という推意を引き出す前提として，その指示物が（談話内に）存在することを前提に（田子内・足立，2005：78）[16] して「細菌培養」を Rheme 部分とは独立した Theme とし，Rheme でその属性を述べる叙述文を選択する。定義にせよ，属性叙述にせよ，その述べる内容は「細胞培養」に関することであるから，Theme 構造は自ずと「細胞培養」を Theme として反復する平行主題型とならざるを得ない。TLT1 (1i) (2) の「細菌培養」を同一名詞でくりかえす場合は，Theme-Theme 間の同一名詞の受け渡しにより結束性は保持されることになるから，残る問題は照応である。

照応は，(1i) の先行詞と，(2) の叙述文の Theme の指示性の観点から判断する。指示性は各節中において Theme の担う意味特性によって決まる。TLT1 (1i) の定義文は，対象語句が本例のようにクラス概念の質量名詞であれば，種指示のゼロ冠詞+ N を選択する。先行詞が cell culture のような総称表現の場合，「一般に…とは」といった一般化した種指示の意味が伝達できれば十分である。特定の実在物を指示しないため，

後続で照応される対象としてみた場合，具体的なイメージを喚起する力が弱く，the 照応詞による照応にはなじまない。となれば，叙述文(2)の主題は cell culture が候補にならざるを得ないが，叙述文の主題は，西山（1985：137）[17]によれば，種指示の名詞句をも含む指示的名詞句であるとされる。cell culture で平行主題型パターンを構築する場合，the による照応や代名詞照応が行われないのであれば，(1i) cell culture-(2) cell culture の種指示名詞句のくりかえしでよいことになる。

これで照応の問題は解決したわけであるが，(2)で，翻訳者は近接指示詞 this を利用して，先行詞 N_1とは別の照応詞 N_2 を Theme に取り立てている。以下，この間の事情を探ってみたい。

「近接」という語が物語るように，指示詞 this には書き手（や翻訳者）の近くにあるものを指示する機能がある。this は談話の先行文脈に明示的に現れている対象で物理的に近接しているものなら何でも，文脈や場面状況に依存せずに直接指示することができる。さらにこの機能が拡張されて，書き手と心理的に近い対象を指示することもできる（安武，2007：99）[18]。本例に見るように，(1i) の cell culture と (2) の *in vitro* technique との間には物理的にへだたりがあるにもかかわらず使用できるのである。this の心的近接指示によって，cell culture が書き手の当面の関心事（＝トピック）であることを示す効果がもたらされる。

また，(1i) の cell culture を (2) で this *in vitro* technique で受け直しているように，this は，先行詞 N_1と違う照応詞 N_2を選択して新しい情報を加えることができる。翻訳者はこの機能を利用して，異なったアングルから (1i) の cell culture を定義し直しているのである。これを可能にしているのが N_1と N_2とを結びつける this の直接指示の力である（小田，2012：300）[19]。the にも言い換えの機能はあるが，the の場合は，N_1と N_2との間の「一般知識によって想定される意味の連関」（同上，300）という制約がある。これをここでの論旨に適用すると，the は「細胞培養とは培養器内で行う実験技術」であるという客観的認識が想定される場合に限って使用できることになる。読み手にそこまでの知識があるのであれば，(1i) で定義を与える必要はないはずであり，したがって，(2) で新たな視点を導入したいときは this の選択が義務的となる。よしんば the が使用できる場合であっても，this N を平行主題型の Theme に選択すれば，N をクローズアップして読み手の関心を引きつつ，叙述を重ねることができるのである。

本用例においては，無題文である SLT1 を TLT1 では二文に分けて定義文の cell culture を，有題文である叙述文の Theme に this *in vitro* techinque として受け渡して，SLT の伝達意図と推意を実現するとともに，以下の文脈で「細菌培養」をトピックとして展開する伏線を張っているのである。

以上見たように，翻訳プロセスは，SLT 解釈による書き手の伝達意図・推意の同定と，TLT 各節における Theme の設定，照応・非照応の判断を経て，構文の選択へと進む。特に，本例のように，Theme 名詞句の意味特性による this の選択とそれに伴う属性叙述の主題構築によって，読み手との関心の共有を図りつつ，次の段階へと進んでいく――こうした翻訳者の協調的な姿勢が読み手に優しい訳文を生むのである。もとは一文であった SLT を TLT では作為的に二文に分けたわけだから，読みやすい訳文を提供するのが翻訳者の責務というものであろう。

（2） Case Study 2

次にもう一つ，平行主題型の SLT を英訳した事例を検討する。先述のように，テクスト形成的動機が構文選択に与える影響は甚大である。平行主題型の場合，英語，日本語ともに，Theme から Theme への受け渡しによって，テクストの結束性を確保する。違うのは，香取（2009：60）[20]の指摘する Theme の明示・非明示である。これが Theme 反復の頻度差を生み，平行主題型の和文 SLT を英訳する際には，同一語句のくりかえしを嫌悪する英語話者の嗜好[21]に合わせて同じ Theme の反復をいかに回避するかが問題となる。

SLT，TLT において，どのような Theme・Rheme 構造や情報構造によって結束性の維持が図られているか分析してみると，平行主題型の SLT，TLT 間に Theme や情報構造の違い，過程構成（構文）のずれがあることに往々気づかされる。こうした場合，SFL を応用して日英対訳のテクスト形成的動機にメスを入れ，訳者の SLT 解釈と TLT における Theme や構文選択の理由を合理の白日にさらすことが重要となる。何の変哲もない平行主題型の和文が翻訳者の解釈によって，英語ではどのような Theme の選択がおこな

われ，変貌著しい構文に化けるか，その様から，両言語の結束装置の違いとその運用の方略を言語学的に解きあかすことができれば，経験則から解脱した，テクスト的等価を実現するスキル獲得につながるはずである。さらには，この知識の蓄積が，各構文が要請する冠詞や数の用法も含めて，文脈に応じた英語構文の組み合わせをパターン化して整理することもできる。こうした知識が英訳にどれほど大きく資するものであるか想像に難くはないであろう。

次のテクストを見てみよう。

【SLT2】

(1)本発明の方法は，アフィニティ分離処理操作を通して分離することのできる希釈溶液の化合物，例えば，希釈発酵溶液の蛋白質の分離に優れた効率を発揮し，(2)公知のアフィニティ分離法と比較して，(φ)必要な処理工程数を抑え，もって収率全体を向上させる手段を提供する。(3)しかも，(φ)流体を前処理してから親和性粒子と接触させる必要もなくなる。(4)また，公知のアフィニティ分離法と比較して，時間をかなり短縮することができる。(5)さらに，(φ) 非多孔質の親和性粒子を使用することが望ましいので，多孔質親和性粒子の使用に伴って生じる問題，例えば，親和性粒子の汚染や圧潰の受け易さ，膨潤，有効表面積の低さなどが解消される。(6)加えて，(φ)一般に，従来のアフィニティ分離法に付随する分岐流（channelingや），濃度ウエーブ現象，濾過媒体の汚染等の問題を生ずることもない。

【TLT2】

(1) The present inventive method provides for the exceptionally efficient separation from a dilute solution of a compound capable of being separated through an affinity separation procedure, such as a protein from a dilute fermentation solution. (2) The present invention provides a means for lessening the number of processing steps required to perform an affinity separation as compared to known affinity separation methods, thereby increasing the overall yield of the separation method. Indeed, (3) the present inventive method can do away with the need for pretreatment of the fluid prior to contact with the affinity particles. (4) Moreover, the present inventive method is able to be conducted in a relatively lesser amount of time as compared to known affinity separation processes. (5) Furthermore, since the present inventive method preferably utilizes nonporous affinity particles, the present invention avoids those problems attendant the use of porous affinity particles, e.g., affinity particle fouling, susceptibility to crushing, swelling, and low effective surface area. (6) In addition, the present inventive method generally avoids problems of channeling, concentration wave phenomenon, and filtration medium fouling associated with conventional affinity separation methods.

まず，SLT2は，(1)の「本発明の方法は」という冒頭のThemeが主語を兼務する形で順次非明示的に受け継がれ，テクストの結束性を保持している典型的な平行主題型展開パターンである。「本発明の方法」は，各節の話題として著者の伝達したい内容全体の出発点となっているので，これを話題的主題（topical Theme）という。(2)から(6)にかけての(φ)は，本来あるべき話題的主題が，同一Themeの反復を回避するため，ことごとくベールで覆い隠されている。この省略は，テクストが一つのまとまったメッセージを伝達していればこそ許されるもので，Themeの非明示的な受け渡しによって反復を避けることによって，視点の安定した和文テクストをもたらすのである。

(3)-(6)には「付加」の意味を表す状況要素（副詞）がThemeの指定席である節頭に配置されているが，先行節と後続節との関係をあらわすためにのみ用いられている。位置的にThemeではあるけれども，著者の述べようとする内容の起点となるものではないので，これをテクスト形成的主題（textual theme）という。本用例では，テクストの結束性は，テクスト形成的主題と話題的主題の非明示の受け渡しによって確保されているのである。

龍城(2004)[22]によれば，SLT2のTheme分析に際しては，和文を単一の文(節)単位で考えるのではなく，ある一つのトピックを基礎として意味的にまとまりのあるさらに大きな単位でとらえる。龍城（同上，

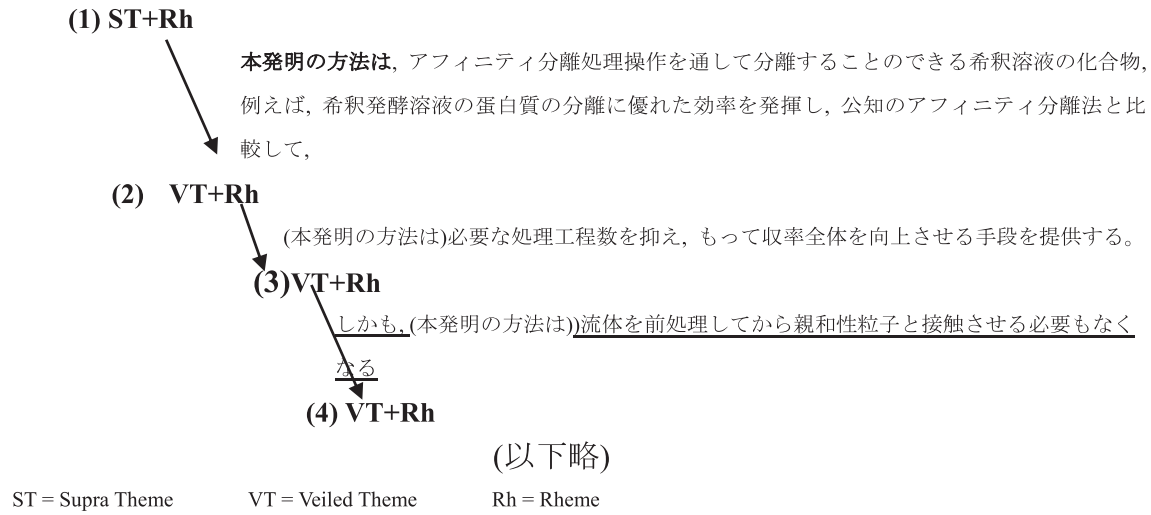

図１．SLT2 における SLT の主題進行パターン

2）はこれを「伝達的単位 = Communicative Unit =CU」と命名している。英文と和文とを比較すると，CU 内には，英文の Theme（主語）が副詞節も含めて 8 つあり，全て同一の表現で統一されている。(1)の The present inventive method が全体を統べるテーマで，龍城（同上，10）の言を借りれば，「スープラテーマ（Supra Theme=ST)」という。(2)以降の the present inventive method と the present invention は，冒頭の The present inventive method と同様の Theme を反復したものであるため，和文ではこれを表層に表出させない。

この省略された主題のことを，龍城（同上，10）は「覆面主題（Veiled Theme=VT)」と呼んでいる。この例のように，ST から派生して VT が連鎖するパターンが和文の平行主題パターンの特徴の一つである。龍城に倣って，SLT2 の和文の主題パターンを示したのが図 1 である。

さて，SLT2 の Theme 構造との等価性を重視し，忠実に対応づけたのが TLT2 である。英語は，Theme の明示的な受け継ぎが宿命であるが，このことは英文の平行主題型パターンでは，同一 Theme の反復が不可避であることを意味する。反復はテクストの結束性を保持する結束装置であると言い条，本用例のように過度に及ぶと，テクストの単調さを招く。先述のように，英語は同一語句の繰り返しを嫌う傾向があり，Theme についても同じことが言える。Theme のくりかえしを回避するには，言い換えによる対処も考えられるが，本用例のように表現にバリエーションのない Theme の場合は，語句の配列を変える処理が選択される。英文のスタイルにクリテイカルな英語話者が本テクストを英訳すれば，Theme 構造を保持するよりもむしろ，同じ Theme の連続はせいぜい二度までで，三度目となると何らかの手立てを講じて，A-A-B，または A-B-A と変化をつけて英訳するであろう。英文明細書でもそうした気の利いた操作を施している例が少なからず観察される。平行主題型の和文 SLT の英訳にあたって翻訳者は，Theme の受け渡しの非明示から明示へという日英両言語の結束装置の差異を訳文に映すか，Theme 構造を変えて英語話者に自然な英訳文を生成するか，Theme 構造の保持・不保持の選択を迫られるのである。

以下，SLT の深い解釈と緻密な TLT 処理によって，一見何の変哲もない平行主題型の和文を，ひとり Theme の繰り返し解消にとどまらず，いかにも平板な英訳文となりがちなところ，翻訳者がどのような英文に変貌させているか，SFL の視点に認知言語学の知見も加えて解明を図ってみたい。流れるように読めてしまう和文をあえて選んだのは，この類の SLT を達意の英文に翻訳するには，言語表層に表れない要素を読む原文解釈の技術と英語構文の知識が求められることを示す好個の例だと考えたからである。

【SLT3】

(1)そのヒトデも，えさをとるときは**巧みな**腕さばきをみせてくれる。(2i)ヒトデは貝などを好んで食べる肉食動物で，(2ii)（φヒトデは）貝にのしかかってしめつけ，(2iii-i)（φ貝が）弱ったところを(2iii-ii)（φヒトデは）開いて，(2iv)（φヒトデは）**口から出した胃液で**消化して　(2v)（φヒトデは）吸収してしまう。

【TLT3】

(1) However, starfish demonstrate considerable dexterity when feeding. (2i) They are carnivorous animals, preferring shellfish. (2ii) Coming upon a bivalve, the starfish attaches itself and, (2iii-i) when the animal has been weakened, (2iii-ii) opens it. (2iv) *Digestion is achieved by secretion of gastric juices which flow from the mouth; (2v) finally** the animal is ingested by sucking. (一部改変)

(Meads ,1981:176)[23] (下線部は主題，囲み部分は重要な情報---太字はより重要な情報。ϕは覆面主題。*，** はThemeの変化。)

上のデータをもとに，Themeと情報伝達上の焦点を表にまとめると，次のようになる。

まず，SLT3は，(1)の「そのヒトデも」という冒頭のThemeを起点として，これが主語兼務の形で順次非明示に受け継がれ，テクストの結束性を保持している典型的な平行主題型展開パターンである。(2ii)から(2iv)にかけてのϕは，龍城のいう覆面主題である。この省略は，先述のように，和文らしい視点の安定をもたらす方略である。

一方，TLT3は，英語話者を読み手に想定した英文である。英語の平行主題型展開パターンにおける同一Themeの律儀な繰り返しを迂回するため，英語話者の嗜好に合わせた処理がなされている。Theme自体はすべて無標[24]であるが，starfishが主題役をはっているのは(2ii)までで，それ以降はThemeが，(2iii-i) the animal，(2iv) digestion，(2v) the animalへと交代している。この突然の交代劇の裏事情を明らかにするのに，SFLは役立つ。

節番号(2iii-i)のthe animalを除いて，(1)から(2iii-ii)まではstarfishという同じ名詞表現が反復されている。同じ名詞のくりかえしといっても，たまたま単複同形であるため気づきにくいが階層がある。まず文番号(1)から(2i)のstarfish-theyはゼロ冠詞複数形の総称表現とその代名詞照応である。ヒトデという種全体に言及する一般化した叙述から，節番号(2ii)-(2iii-ii)に至って，the starfishとやはり総称表現ながら，the +単数形が用いられている。the +単数形が総称解釈を受けるには，当該名詞句が種として十分に確立されていることが要件とされる（藏藤，2012：86）[25]が，これは，種として十分に確立されるまでは使用できないということに他ならない。まず，真の総称表現であるゼロ冠詞複数形とその代名詞によって一般化されたヒトデを話題に取り上げ，機が熟した段階で，the starfishがいよいよ出番を迎えるわけである。その一方で，総称のthe +単数形は，theの区別する力によって他種との対比を意識させる（同上，86)。本用例では，ヒトデを他の種と対比して，ここで述べる活動はほかでもないヒトデ固有のものなのだということを伝達しているのである。このように，両者には，「使用条件の厳格さ」における階層と「対比のニュアンスの有無」の違いがあるのである。

日英のThemeは節番号(2iv)と(2v)において交代する。日英のThemeの違いがあるとき，翻訳者がTLTの構文を選択する際の動機を言語学的に説き明かすところに，対訳の比較分析の意義がある。この解

節番号	Theme		情報伝達上の焦点	
	SLT	TLT	SLT	TLT
(1)	そのヒトデも	starfish	腕さばきは**巧みであること**	considerable dexterity
(2i)	ヒトデは	They (= starfish)	肉食動物	carnivorous animals
(2ii)	ϕヒトデは	ϕ the starfish	のしかかってしめつけ	Coming upon/attaches itself
(2iii-i)	ϕ貝が	the animal	弱ったところを	When tne animal has been weakened
(2iii-ii)	ϕヒトデは	ϕ the starfish	開いて	opens
(2iv)	ϕヒトデは	*Digestion	**口から出した胃液で**消化して	by secretion of gastric juices which flow from the mouth
(2v)	ϕヒトデは	**the animal	吸収してしまう	is ingested **by sucking**

表３．SLT3のThemeと情報伝達上の焦点の比較

下線部は，Themeの食い違いを示す。太字はより重要度の高い情報である。

明は，Theme 分析に加えて，情報伝達上の焦点分析などのテクスト形成的意味の分析が出発点となる。以下の紙面では，SLT3 のテクスト形成的意味を分析することによって，翻訳者の構文選択の動機をあぶりだしてみよう。

ここでわざわざ Digestion で文を切り出している背景には，少なくとも三つのテクスト形成的動機が潜んでいると考えられる。

一つは，by secretion of gastric juices which flow from the mouth を対比的焦点，すなわち，他の消化の態様と対比する形で提示したいという動機である。

(2iv)の「(φヒトデは) 口から出した胃液で消化して」の「口から出した胃液で」への言及は，咀嚼などの機械的消化によって胃に送り込まれた内容物が，そこで消化酵素によって加水分解することによっておこなわれる通常の消化吸収作用ではなく，ヒトデの場合は，「噴門胃を口の外に反転させて，包み込んで消化し，これを腕の中にのびている盲嚢に送って吸収する」(平凡社大百科辞典，1985：555)[26]特殊なものであり，これが情報伝達上の焦点となることを伝えているのである。

単に焦点を置くというだけなら，end focus (文末焦点) の原則により，by secretion of gastric juices which flow from the mouth を節末に配置して，2-1. のように書けばその目的は達成される。

2-1. The starfish digests the animal by secretion of gastric juices which flow from the mouth.

2-1. ではしかし，the starfish と他種生物との対比はあっても，消化の態様に関する対比は生じない。(2iv)では，「口から出した胃液で」の部分を，ヒトデの消化作用の特異性を，通常の消化作用と対比して焦点化する英訳処理が求められるため，それに見合った構文選択が必要となるのである。

Digestion を Theme に据えるさらにもう一つの動機は，(2iv)までの連文の流れから，「(貝が) 弱ったところを開いて」さてどうするかとなると，咀嚼や消化しないと吸収できないはず，という予測可能性に基づいた Theme の変更である。翻訳者は，予測可能性を言表に表れない，いわば接続詞に代わる結束装置として，「消化 (のしかた)」に話題を変えても，英語話者なら理解できるはずと想定し，Digestion を新たな視点として選択しているのである。和文なら結束性の乱れを感じさせるこの Theme の選択の背景には，認知言語学にいう事態把握のしかたの日英両言語間の違いもあるようだ。「一貫した主観的事態把握」(香取，2009：56) を特徴とする和文話者と比較して，傍観的に「事態を把握し叙述する」(同上，60) 英語に慣れ親しんだ英語話者には，Theme の変遷は容認されやすいのである。Digestion の選択は，消化に際立ちを与え，読み手に，ヒトデの消化が常ならぬしかたで遂行される様が Rheme で明らかにされることを期待させる。そこで，この Theme に「ヒトデの消化活動は常識的な消化か，特異なもののどちら(x)か」という変項(x)を含む WH-疑問文の意味を担わせ，Rheme で「それは口から出した胃液でおこなう特異なものだ」といった答えを選択指定するような意味機能を持つ構文が選好される。これを実現するのが倒置指定文である。

このように，倒置指定文は，変項(x)を埋める値を選択指定して対比焦点化する機能を持っている。この機能から，テクスト内においては，「論旨の流れをいったん止め，新しい別の角度から個体確認の認定をおこなう」(安井，2008：90) ような場面での使用が多くなる。

文の key point において視点を変えて核心を衝くような事態を述べるというこの倒置指定文の本質が，Digestion を Theme に選択し一般論としてヒトデの消化の態様を提示したいという翻訳者の第三の動機と相まって，それまでの淀みのない Theme 構築の流れを突然断ち切るサスペンス効果をもたらしている。カメラワークにたとえれば，SLT3 が終始一貫「ヒトデ」の動きを追う画像であるのに対し，TLT3 は，シーン(2iii)の前後で撮影技法が変わっている。(2iii)までは，ヒトデが貝にのしかかる様子を実写でとらえているが，(2iv)で，外からは捉えにくい消化の様子を，例えばイラスト動画を使って客観的に解説する画像に切り替わる如き趣がある。

以上が，テクスト形成的意味の分析から明らかとなった(2iv)の倒置指定文選択の動機である。しかし，(2iv)の倒置指定文は変種であることから，さらに解明を図らなければならない疑問点が存在する。ここでは，SFL の同定モードの説明が威力を発揮する。

(2iv) Digestion is achieved by secretion of gastric

juices which flow from the mouth;

倒置指定文は，「A は B だ」'A be B' という形式のコピュラ文のうち同定モードの一種で，先述のように，B は A の言い換え表現であるなど「同一の個体」(同上，89) を指し示すことから，A=B の関係が成立する。(2iv) がコピュラの一種の倒置指定文であるのなら，動詞は be で十分なところ，achieve が受動態で用いられているのはなぜであろうか。この動詞は，達成相の動詞とされ，この相（アスペクト）の動詞は，Thompson（2004：116）の言うように，行為やアクションを表す物質過程の意味を持つと解釈される場合（“What does the starfish do?”の答えとなる）と，事態の終結した結果状態を表すと解釈される場合（“What is the resulting state?”の答えとなる）とがある。受身形で用いた場合は，結果状態に焦点があり，行為やアクションの過程は背景化される。つまり，本用例では，コピュラとしての be 動詞の役割が前景化され，Digestion is by secretion of gastric juices と書くのと実質的意味は変わらないことになる。

さらに，A (=digestion) が名詞句，B (=by secretion of gastric juices) は副詞句であるのに，両者に等式関係が成り立つというのはどういうことかが問題となる。この場合は，再び，digestion が動詞派生名詞であることに思いを致さなければならない。ここでは，digest という動詞の持つ生理現象の目的・機能面が強調され，機能は本来，前置詞句や副詞節で表現できる状況要素であるから，この digestion はアスペクト的には how digestion takes place といった動名詞に近い「～のしかた」という意味を帯びている。そう考えれば，by secretion of gastric juices which flow from the mouth という状況要素との間に等式関係が成立することが理解できよう。

(2iii-i) (2v) は，the animal という客体を主語にたてることによって，状態文とし，その状態変化を強調している。(2iii-i) は，「貝が弱らない」限り，こじ開けることは叶わない。(2v) は，finally という副詞句を立てて，(2iv) からの時間的な tie を維持したうえで，対象がとうとう吸収されてその姿を消失する様を描いている。

４．おわりに

以上，二つの事例研究について検討した。紙幅の制約上割愛せざる得なかった内容も少なくない。例えば，Case Study 1 では，SLT を二文に分けて TLT を生成する例を見たが，原文により忠実な SLT-oriented な英訳文生成も可能である。また，Case Study 2 では，平行主題型に絞って考察したが，連続主題型，Hypertheme の展開にも談話分析が活用できる。また，本稿では簡単に触れるにとどめたが，名詞化は SFL の術語でいう文法的比喩という現象で，その選択には，対人関係的動機や観念構成的動機も関わってき，英訳上重要かつ興味深いテーマである。さらに，日英翻訳においては，翻訳者の第一言語への転移現象も検討を要する課題である。これらについては機会を改めて検討したい。

参照文献と注記

(1) 川島俊男　特許翻訳文改良のためのパラグラフライティング　パテント　日本弁理士会 pp.41-51 (2001.3), pp.73-79 (2001.5), pp.51-64 (2001.8) pp.55-67 (2002.1)

(2) 成瀬武史　英日・日英翻訳入門　原文の解釈から訳文の構想まで　(1996)　研究社出版

(3) Mona Baker　In other words (1992) Routledge
The ultimate aim of a translator, in most cases, is to achieve a measure of equivalence at text level, rather than at word or phrase level…. the translator will need to adjust certain features of source-text organization in line with preferred ways of organizing discourse in the target language. (p.112)

(4) Geoff Thompson　Introducing Functional Grammar (2004) London: Edward Arnold.

(5) 自然言語処理，マルチモーダル分析，心理療法効果測定のための言語分析などがその一例である。

(6) この点で形式主義による伝統文法とは一線を画する。

(7) 大島眞　日英両語の談話分析　(1997)　リーベル出版

(8) 長沼美香子　日英翻訳における Theme の課題　JASFL Occasional Papers (2-1). 日本機能言語学会. pp.115-127 (2001)

(9) M.A.K. Halliday & Christian M.I.M. Matthiessen An Introduction to Functional Grammar (2004) Hodder Education

(10) SFL では，英語のすべての動詞をその持っている経験的意味の上から，物質過程 (material process)，存在過程 (existential process)，関係過程 (relational process)，発言過程 (verbal process)，心理過程 (mental process)，行動過程 (behavioural process) の 6 つに分けている。

(11) 熊本千明　コピュラ文の語順と解釈―名詞句の意味

特性に注目してー 『研究論文集』 第3集第1号，佐賀大学文化教育学部，pp.9-27（1998）
(12) 安井稔　英語学の見える風景 （2008） 開拓社
(13) The Token-Value structure is probably the most difficult to come to terms with in the entire transitivity system.
(14) Halliday は，文と節という術語を区別して用いている。文という単位を認識するのに，書きことばではピリオド，話しことばでは音調単位というそれぞれ異なる手段が用いられているので，節という術語を用いて，話しことば，書きことばが共有する主語（subject），定性（finite）と呼ばれる文法要素を含む単位を設定している（龍城正明　ことばは生きている　選択体系機能言語学序説 p.3（2006） くろしお出版）。
(15) 修飾要素の一部の焦点化の方略としては，本例のように平行主題型による処理のほか，主語に提示的焦点を担わせる処理も考えられる。
(16) 田子内健介・足立公也　右方移動と焦点化 （2005） 研究社
(17) 西山佑司　措定文，指定文，同定文の区別をめぐって 慶應義塾大学言語文化研究所紀要　通号 17（1985）
(18) 安武知子　言語現象と言葉のメカニズム　日英語対象研究への機能論的アプローチ （2007） 開拓社
(19) 小田涼　認知と指示 （2012） 京都大学学術出版会
(20) 香取芳和　日本語テクストの結束性から考える英日翻訳における望ましい視点の取り方，視線の向け方　翻訳研究への招待　3号　日本通訳翻訳学会　翻訳研究分科会編 pp.51-64（2009）
(21) 文章は書き手と読み手の協調関係によって成立するという考え方によるもので，読者の協力を期待しない自立型の文章，例えば，教科書などでは，同一表現の反復が頻繁である。明細書でもその傾向が強いが，基本的な英語文章作法として英訳翻訳者が念頭に置いておくべき傾向である。
(22) 龍城正明　Communicative Unit によるテーマ分析 ―――The Kyoto Grammar の枠組みで---同志社大学英語英文学研究 76 巻　pp.1-29（2004）
(23) Leo J. Meads　鋭い英語表現「朝日新聞を英訳する」（1981） 朝日イブニングニュース社
(24) 英語の機能分析では，節（clause）の頭に出現する語句を Theme として扱う。主語が節頭に配される構文では，主語 = Theme となる。これに対して，主語以外の語句が文頭に来る場合は，その語句を Theme とする。英語では，主語が文頭に置かれるのがあたりまえであるから，主語を兼務する Theme を unmarked Theme（無標主題）という。わざわざマーキングするほどのことはない，通塗の事柄を表現するものという意味である。一方後者は，marked Theme（有標主題）といい，書き手が伝達したい内容が先行提示文脈から変化していることを示すために用いられる。
(25) 藏藤健雄　総称文と冠詞：最新言語理論を英語教育に活用する pp.84-93（2012）開拓社
(26) 平凡社大百科辞典　（1985） 平凡社

（原稿受領 2016. 2. 25）